

対策本部長代理として

2011 3.11 14:46

本院 診療部長

上原 茂樹



平成23年3月11日(金)午後2時46分頃、妊婦さんの超音波検査をしていたところで「揺れ」を感じた。その矢先、削岩機で建物を壊すような激しい振動がきた。とっさの行動がままならず、「早く止まってほしい」と願うのが精一杯であった。震度6強。瞬時にライフラインが止まった市内。窓の外では信号機は消え渋滞が起こっていた。まず外来患者さんの容態を確認して早く帰宅するように促した。各病棟では、互いに手を取り合っとうずくまる人、茫然自失の人、患者さん全てに恐怖体験による動揺が続いていた。病室では場所が移動したベッドにロッカーやクローゼットが倒れており、ナースステーションではコンピュータやモニター・カルテ・書籍が倒れ落ちていた。幸い患者さんやスタッフは全員無事で、時々おこる余震を気遣いながら病室の片付けを開始した。停電になると非常自家発電が瞬時に作動するはずが想定外の故障(自家発電装置用の蓄電池が古かったため)。手術は3件が進行中であったが、懐中電灯(LED仕様のものが購入されていた)の下で続けられた。

午後3時20分に院内災害対策本部を設置した。院長が上京中であったため、医療安全管理委員長に任命されている私が本部長代理となった。当初対策本部がとったアクションは、トリアージによる急患対応態勢の開始、自家発電の確保(すぐには困難で自衛隊より装置を借用)、都市ガスによる暖房が止まったため患者さんへ在庫の布団・毛布の配布、食糧・水備蓄の確認と院内炊き出し、仙台市・宮城県の両災害対策本部へ出向いて食糧・水・毛布などの援助要請、連合会本部へ状況報告と援助要請、施設損傷の実態調査、職員の安否確認、灯り(懐中電灯とろうそく)の確保、トランジスタラジオやワンセグによる情報収集、幹部・全体会議の態勢作り、マスコミ対応などであった。これ

らが役割分担され迅速に実施された。夜に入り、宮城野分院の半壊による患者さんの転院収容の要請があり受諾。翌朝には看護部長と事務次長とで分院へ視察に行き、損壊の惨状を目の当たりにして危険性を認識した。分院長の決定があり、患者さん全員の総計159名を本院へ搬送・収容する大移動を行った。

「備えあれば憂いなし」とは言うものの、ライフラインを完全に失って電話も通じない「てんやわんや」の状態では災害対応マニュアル通りには事は運ばない。しかし、病院は患者さんのために存在するものであり、患者さんの生命を保障するとともに、物資が無い中で少しでも快適さを提供できるように工夫することが原則である。その原則を満たすべく各部署の職員は献身的努力をした。震災当日こそ指示系統の混乱があったが、その後は対策本部が現場を統括し効率的に職員が動けるように機能したと思っている。それに役立ったのは担当者の情報の共有と合議による判断であり、それを様々な会議を通して現場に伝達したことであったと考えている。

今回の震災から、何が足りて何が足りなかったかの検証を十分して、不足があったところは改善しておく必要がある。年月を経れば風化してしまうであろう今回の震災の記憶をいつでも思い出せるように文書にして、警鐘の役目をもたせるべきであろう。また、いつ、どこで起こるかもしれない災害に対応できるように、それらの文書を連合会本部や各施設の危機管理に役立たせていただきたい。

最後に、皆様から物心両面にわたる援助を頂戴し、被災下に安堵感をもてたとともに人々の温かさを感じた。助け合いの心が我々の支えになったことに深く感謝申し上げます。



■ 災害対策本部内の筆者停電のためろうそく使用



■ 手術室 LED懐中電灯による手術